

## 当院における造影超音波検査での末梢静脈路確保実施への取り組み

◎杉山 千晶<sup>1)</sup>、深谷 えみ子<sup>1)</sup>、中井 利和<sup>1)</sup>、佐野 菊絵<sup>1)</sup>、山田 裕子<sup>1)</sup>、伊奈 佳代<sup>1)</sup>、折戸 邦代<sup>1)</sup>、吉本 尚子<sup>1)</sup>  
公立西知多総合病院<sup>1)</sup>

【はじめに】医師の働き方改革に伴うタスクシフト/シェアの対応状況は、2024年4月時点で10行為のいずれも実施していない施設が約8割あると日臨技報告から発表された。タスクシフト講習会をきっかけに生理検査室で関わっているソナゾイドを用いた造影超音波検査の運用見直しを行ったので報告する。

【経緯】当院は開院当時2015年からソナゾイドを用いた造影超音波検査を生理検査室にて行っており、医師は画像描出など診断、看護師はルート確保や安全管理、臨床検査技師は超音波機器操作などを行っている。各職種の業務軽減のため、タスクシフト講習会を終了した臨床検査技師が末梢静脈確保の業務に加わるため、今回、看護局主催の研修会に参加した。

【取り組み内容】末梢静脈路確保の手技取得のため看護局静脈注射プログラムインストラクターの協力を得て、事前学習から集合研修までの一連のスケジュールに沿って研修会に参加した。事前学習は、当院看護師がスキルアップのため利用しているWebソフトにて、手順・基本

事項・映像・チェックリストを閲覧し、ソフト内のテストを受け、満点が取れたら実技研修へと進むという流れであった。実技研修では実際に当院で採用している留置針などを使用し、より実践に近い状況でシュミレーターを使った実技練習を行い、審査を得て合格してから、研修に参加している医療従事者に対し、末梢静脈確保を行った。

【結果・考察】実技研修では普段業務に触れることのない留置針や点滴ルートの扱い方や注意点を実際に聞くことができた。臨床検査技師が末梢静脈確保まで行えば、その後の検査が効率よく、実施できる時もある。タスクシフト講習会を終えていない臨床検査技師もが受けていないため、全員できるようにすることが課題である。

連絡先 公立西知多総合病院 臨床検査科  
0562-33-5500 (内線 21411)